

来日インドネシア人の出身地調査

著者	間瀬 朋子
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	51
ページ	396(41)-395(42)
発行年	2017-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008492/

来日インドネシア人の出身地調査

間 瀬 朋 子

期 間：2016年4月26日～5月4日

出張先：インドネシア・ジョグジャカルタ特別州

研究目的：漁業・水産加工労働者（実習生）として来日するインドネシア人の出身地を訪問し、出稼ぎ送金のある暮らしや帰還後の状況を調査すること。

漁船乗組員、あるいは漁業・水産分野の技能実習生として来日経験のあるインドネシア人を対象として、聞き取り調査を実施した。具体的な聞き取りの内容は、日本へ出かけるまでの動機やプロセス、日本での仕事と暮らし、日本からの送金、帰国後の仕事と暮らしなどについてである。

準備調査として3月末、宮城県気仙沼にて漁船乗組員Aさん（東ジャワ州トゥルンガレッツ県出身）、水産加工の技能実習生Bさん（東ジャワ州ジョンバン県出身）、水産加工員Cさん（東ジャワ州マラン県出身）、Dさん（西ジャワ州スカブミ県出身）など約10人に話を聞いた。

今回の出張の初めと終わりに、出張先のインドネシア・ジョグジャカルタ特別州グヌン・キドゥル県ウォノサリ県プライェン郡にて、5～7年前に日本で研修生として漁船に乗っていたEさん、Fさん、Gさんの3人に対する聞き取りを実施した。いずれも3年間の日本での研修・実習のあと、インドネシアの故郷（ウォノサリ県）に戻り、いまは漁業とはまったく関係のない暮らしをしている。日本で稼いだ金でそれぞれ、きのこ栽培、バイク修理工場、軽食屋台のビジネスを立ち上げたが、いずれもそれほど成功しているわけではない。Fさんは来たる7月から韓国での漁業労働に出発するための準備に忙しいが、「エージェントに大金を支払って出発するのだから、韓国ではコツコツと稼ぎたい」と労働意欲を示した。Eさんは「自分にはエージェントをつうじて韓国や台湾に漁船員として出稼ぎに行くだけの資金がない」と言った。Gさんは軽食屋台での稼ぎによって妻と娘をじゅうぶんに養えないと考えていて、近いうちに首都ジャカルタに建設現場工として働きに出ようとしている。

先の3月に気仙沼で話を聞いた水産加工の実習生Cさんの家族に会うために、中ジャワ州クラテン県トゥルチュッ郡も訪れた。トゥルチュッ郡は、かつて金属加工の実習生として三重県に住んでいた彼女の夫の出身地である。その姪のHさんも、水産加工の実習生として茨城県にいたことがある。トゥルチュッ郡の特定村からおもに水産加工の実習生として来日した経験のある人はおよそ100人にのぼる、と言われている。日本での実習生経験者と地縁・血縁関係をもつ人たちが、先人の経験談を聞き、入れ替わり立ち替わり日本へ出かけていく。同村では、ある人が実習期間（一般的には3年間）を終えて帰郷したあと、後進（とくに血縁関係にある人）に実習生としての日本行きの機会を「伝承する」ことにより、その一家の経済を成り立たせようとする「戦略」があると言えるかもしれない。

出張の中盤、東ジャワ州トゥルンガレッツ県ワトリモにて、カツオ漁の実習生として来日経験のあ

るIさんとJさんに聞き取りをした。Iさんは、実習生として日本滞在中に稼いだ金で船を買い、現在は太刀魚漁をして生計を立てている。Jさんも、父親から受け継いだ船で太刀魚漁に従事している。

近年の移民研究では、今回の出張で出会ったような帰還移民たちが地域社会経済の発展・変容をめぐる主要アクターになっていると指摘されている。出張の結果を活かして今後、漁業・水産加工労働者（実習生）として来日するインドネシア人が①どのような経路・機関を通じて日本での職を探し、②日本でどのような就労形態と日常生活を経験し、③インドネシアへの帰国後、いかに日本での経験を活かして、出身地での社会経済生活を再編成しているのかについて、より具体的な調査研究を進めていく。

（研究員）